被災作業所、存続の危機

無認可が壁 国補助に難題

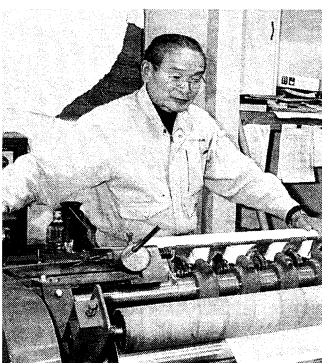
住民協力、販路拡大の矢先

中越地震で1人に大きな被害を受けた十日町市の小規模作業所「ワークセンターあんしん」が、存続の危機に立っている。震災から活れたボランティアの大工さんらが無償で修理に取り組み、県も災害復旧事業の対象とするよう国に要請している。ただ、無認可の施設で、補助の見通しは厳しい。地域住民の理解が進み、事業も軌道に乗り始めた矢先の出来事だっただけに、関係者は支援を募っている。

十日町で11人雇い運営

「あんしん」は02年秋に開所。地元NPO法人の就労支援事業として、18～65歳の知的、精神障害者11人を雇用し、トイレットペーパーを製造、販売している。収入の多くは、紙を定期的に購入する住民会員約400人と市役所に頼っている。

販路拡大に努めて、昨年11月ころから、ようやく「少し赤字」の状態に



トイレットペーパーを巻く機械は移動できないため、半壊した建物で作業は続く＝十日町市の「ワークセンターあんしん」で

所長の樋口功さん(56)は「雪で、いまは仕事ができなくなるかもしれない」と心配する。

本格復旧は春以降で、改修費用3800万円を調達するめどは立っていない。長期休業すれば、顧客が離れ、作業所そのものの運営も厳しくなる。

作業所では、樋口さんの娘(22)も働く。樋口さんは「作業所の原点は、障害者も地域で一緒に生活していけるようにすること」。製品を売ってもらうことで障害者の存在は地域住民に認められ、今では数人がボランティアで製造や配達を手伝う。

2月から作業所で働く市内の女性(23)は、中学卒業後は働き口がなく、家の手伝いをしてきた。今は、一緒に働く友達とテレビドラマの話をしたり、1～2万円の月給でアイドルの雑誌を買ったりするのを楽しみにしている。以前よりも、笑顔が増え、人との会話も多くなった。

地域の同種施設は定員いっぱいの状態だ。女性の母親(58)も「働く喜びや、仕事を覚えさせてくれる『あんしん』は娘の生きがいになっている」と話している。

県によると、社会福祉法人や公立の福祉施設の場合、災害復旧も補助の対象となるが、無認可の「あんしん」は制度の枠外。国への要望で、小規模作業所も復旧事業の対象になるよう求めているが、実現するかどうかは分からないという。

「あんしん」は復旧のための義援金を集めている。問い合わせは☎025・7・50・2566)へ。

2004年12月16日 朝日新聞